

たんぽぽ



vol. 57

平成19年1月発行

発行者 放送大学

富山学習センター

責任者 所長 小谷 仲男

ハンス・ヨナス*を訪ねて

客員教授 盛永 審一郎

ドイツの都市にあってはどこか殺風景な感じがするメンヘングラートバッハに降り立ったのは2度目である。前は、とっさの思いつきで、夕暮れ時に小一時間ほど訪れた。出会う人々にヨナスの生家はどこかと尋ねたのだが、ヨナスという名前すら知らないようだった。市立図書館の司書の方ならご存じであろうと尋ねたが、日本では手に入らないメンヘングラートバッハ市で刊行した非売品の本を持ってきて、たぶん、ビスマルク通りだという。しかしその名の通りを何度も歩いたが見つめることはできずに、断念して宿のあるマインツに戻った。日本に帰ってから、ヨナスの回想記を開くとモーツアルト通り9番地とちゃんと出ている。何だ、司書の方もあてずっぽうを言ったのだと思った。



2年後、再びメンヘングラートバッハを訪れる機会を得た。今度は、すぐにモーツアルト通りを探した。閑静な住宅地。本に掲載されている写真の通りの家が今もあるのを確認した。クリーム色で塗られた家だった。しかし、そこには、「ここでヨナスが生まれ、育った」というレリーフはなかった。通りを犬を連れて散歩している初老の人に尋ねたが、ヨナスについてはやはり知らないようだった。ヨナスの家を後にして、再び市立図書館を訪ねた。前回訪問したとき答えてくれた司書の方がいた。でも私のことなどさらさら覚えていないようだった。今度は、自分で書棚へ行き、市編纂の歴史シリーズ15巻目、「ハンス・ヨナス」の本を手にすることができた。すると、そこには、冒頭でヨナスの生まれた家はビスマルク通りと出ていた。司書の方が教えてくれたとおりだった。それなら、モーツアルト通りの家は何なのかと思って読むと、「1910年7歳の時にモーツアルト通りに引っ越した」と書いてあった。だから、モーツアルト通りの家は「父の家」なのだ。しかも、その家は、市の著名な建築家ロバート・ノイハウスが建てたと書いてあった。当時のヨナス家がユダヤ人としては裕福な織物業の工場主だったということがそのことから窺い知れた。

地図にはハンス・ヨナス公園がのっている。そこも訪れた。小さな閑静な公園で、うっそうと木が茂っている。入り口には、ヨナスが散歩する姿の像が建立されていた。しかし、像があまりにも小さいので、ヨナスが貧弱に見えた。しかも頭と顔には青銅が酸性雨のせいか溶けて流れた筋ができていた。残念である。

*ハンス・ヨナス(1903-1993) ドイツ生まれのユダヤ人。ハイデガーの弟子。大戦後カナダ・アメリカへ移住。ニューヨーク社会調査新大学教授。アレントは生涯の友人。グノーシスの研究家。70歳になって書いた『責任という原理』が高くドイツで評価され、ゲーテ平和賞などを受賞。